

近代日本人の精神史を書き直す

鈴木貞美さん

(国際日本文化研究センター教授)



「自然主義や新感覺派という文芸思潮を追うのではなく、言葉の芸術という近代的新見方でもなく、文芸作品の生きた姿を時代の精神史から明らかにする。」これは四半世紀前に刊行された『日本文学史』(全七巻、河出書房新社)のマニフェストだ。

鈴木貞美さん(61)はそのシリーズの企画・編集者で、筆者は二十代のころ出版業務や校正の手伝いをしたことがあった。こちらはまるで戦力にならず、「迷惑をかけたが、『文芸史』そのものは、当時の先鋭的な表現論や書論を取り入れた斬新なものだった」とを覚えていた。

それから二十余年。鈴木

生命観の大パノラマ集大成

土曜の訪問



さんは文芸評論家から研究者となり、畏く考査を繰り返してきた「生命」という言葉を軸に、二十世紀近代の日本人の精神史を書き直した『生命観の探究』(作品社)を出した。注釈や索引まで含めると九百ページを超える大書。扱われる領域は文学はもちろん、芸術・哲学・政治思想・宗教・自然科学など、およそ近代の内実をなす内外の文化全般を網羅、横断している。

鏗々く雨のなか、京都の山中にたたずむ国際日本文化研究センター(日文研)に、鈴木さんを訪ねた。

日露戦争後の都市や大衆社会の出現にともない、△生命△という表現が文学や思想の領域で頻出し始めたのを、最初は大正生命主義△と受け、手探りで追いついた。国民国家や資本主義で社会をつくり変え、科学技術が大きく自然を改造した近代社会はどんな進展すると同時に、さまざまな紆余曲折や弊害も生み出した。試行錯誤を重ね、やがて芸術や文芸の作品や思想に底流する生命観の地図を作ること、二十世紀近代が相対化でき、有効にどうも置き換えることが分かってきた。そしてこの本で、分子生物学や情報科学など生命観のコードが複雑化し、環境問題など生命維持の問題が切迫している現代社会にそれをつなげることで、ようやく広げた風雨の結び目を一つにできた手応えを感じています。

明治・大正・昭和をまたぐ歴史分析を踏まえた生命観についての壮大なパノラマは簡単に要約できるものではない。それぞれの時代の文化を整理し、その精神史的な確たるには、ぜひ本書に当たってほしい。

なかで興味深いのは、海外から移入された思想や学問を伝統的な感性や思考とどうすり合わせて日本化したかという経緯を「リセナター(受容態)」という概念で説明していることだ。

文化

このリセナターにより、キリスト教、ターウィンの進化論、ベルグソンの生命哲学、トルストイの博愛主義、フロイトの心理学などが日本で創造し直され、生命の神秘や自然主義のさまでさまざまな芸術作品を生み出した。と同時に、生命観の表象を人間から宇宙まで体系化した西田幾多郎の哲学が登場する。そしてそれは時代の趨勢に影響されながら、時に政治的な意味合いもあつた。

「生命」という言葉は曖昧で多義的ですから、とんでもない観念が実感にすべつながつてしまふ危険もある。宇宙的生命観が天體に結びつく篤志家の思想や、ナチスの優生思想は歴史の錯誤ですし、現代のコンピュータの精密なシステムを組織や身体と類比させる発想もどこか危うい印象です。でもそういうことを回避するのはなく、しっかりと付きあひながら、原理

ではどうしたら、危うきと付きあひることができるのか。

「研究者として、いろいろなイデオロギーや党派性から自由であること。そして、より専門化している學術の統合も必要です。細分化された知の領域での手前みそな各論で済ませるのではなく、さまざまな分野の研究者が顔を揃めて共同作業しなければ、困難な時代には立ち向かえません」と、たちどころに答えた。国際的な学術研究を實踐している日文研の役割を十分に踏まえた考えだ。

念願の集大成を表現できた経緯と今後を尋ねた。

「去年の夏にポロランドで交通事故に遭い、三ヶ月の完全休養をくらざるをえなくなりました。その時期に仕上げました。まさにけがの功名の本。本論は何かまとめたけれど、各論はまだまだ。校査を仕上げさせて日本の近代の知の仕組みを総ざらいしたい。△生命△とは実体ではなく観念の装置ですから、自他共に応用可能なんです」

(大日方公典)

主観への傾斜を繰り返す生命主義の歴史は相対化し、近い将来の未知の危機も考える必要がある。